

平成二十五年十二月十五日(日)

第四四四回 史跡めぐり

古代を忍ぶ〔国分寺〕・太古からの〔湧水群〕

そして〔江戸東京の建物〕を楽しむ

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四四四回 史跡めぐり

古代を偲ぶ「国分寺」・太古からの「湧水群」
そして「江戸東京の建物」を楽しむ

- 日時 平成二十五年十二月十五日(日) 雨天決行
- 集合 午前八時 JR南越谷駅前
- 参加費 四、八〇〇円 (交通費・昼食代・入館料・保険料・資料代など)
- 案内者 常任理事 篠原陸郎



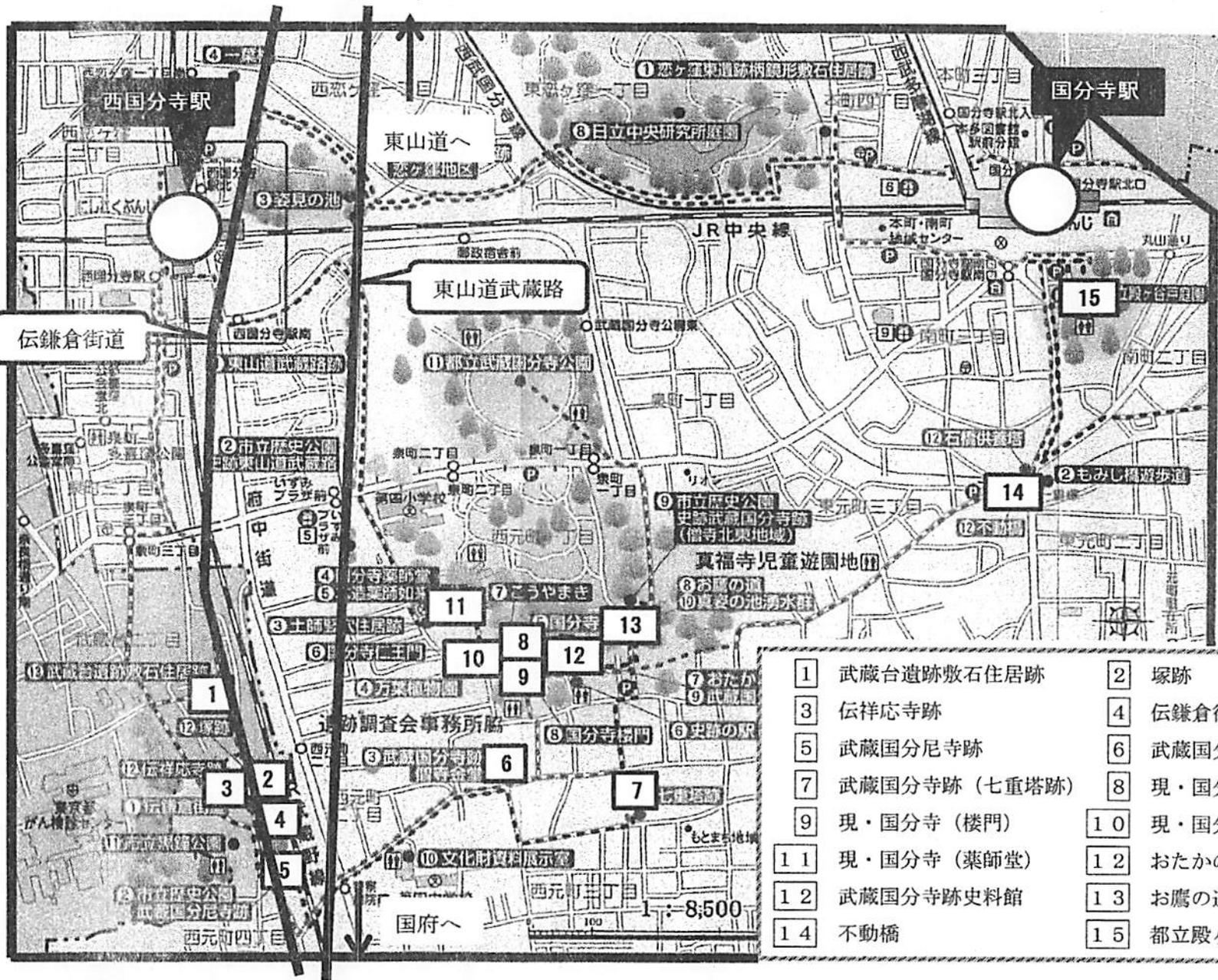
国分寺市地名の由来

七四一年に聖武天皇の命により建立された国分寺(武蔵国分寺)がこの地にあったことに由来する。

小金井市地名の由来

小金井の由来について複数の説がある。一つは市の「はけ」(崖のこと) 南側を金井原と呼んでいたものを「こがねいはら」と読んだというものを、もう一つは「はけ」に沿って黄金(こがね)に値する豊富な湧水があるのを「黄金の井」や「こがね井」と称したというものである。

散策ルート



- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 武蔵台遺跡敷石住居跡 | 2 塚跡 |
| 3 伝祥応寺跡 | 4 伝鎌倉街道 |
| 5 武蔵国分尼寺跡 | 6 武蔵国分寺跡 (金堂跡) |
| 7 武蔵国分寺跡 (七重塔跡) | 8 現・国分寺 |
| 9 現・国分寺 (楼門) | 10 現・国分寺 (仁王門) |
| 11 現・国分寺 (薬師堂) | 12 おたかの道湧水園 |
| 12 武蔵国分寺跡史料館 | 13 お鷹の道・真姿の池湧水群 |
| 14 不動橋 | 15 都立殿ヶ谷戸庭園 |

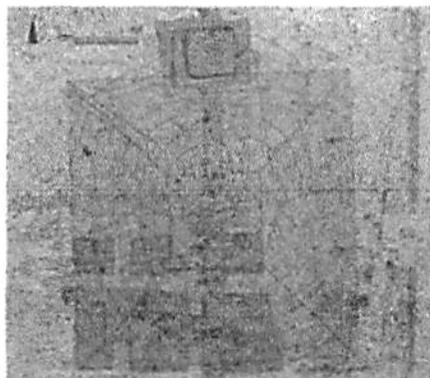
○ 鎌倉街道沿いに残る貴重な中世の遺跡

2

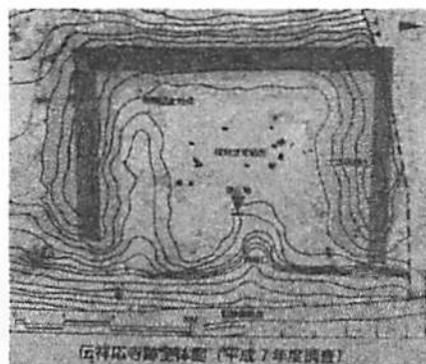
塚跡

・この塚（盛土遺構）は底面一辺約二十二m、高さ約三mで、一辺約七mの平坦な頂部を有する方錐体に復元され、周囲の地山層（黒褐色土）を削った土で築かれている。旧来「土塔」といわれ、国分寺に關係を有するものとされてきたが、二度に及ぶ発掘調査の結果、中世（十四・十五世紀頃）において種々の祈願の成就を得るために作法に則り本尊に対し祈禱するために築かれた修法壇跡で、伝祥応寺との關係を有するものと推考される。

・鉄道拡張工事に伴う第一次調査（一九六九）では、下層より平安時代堅穴住居跡二軒、盛土内より明鏡一枚、頂部に主体部と思われる粘土敷き硬化面、その付近より梅瓶型瀬戸灰釉瓶子一点や素焼きの土師質土器細片数点などが出土している。



塚



伝祥応寺跡全体図

伝祥応寺跡全体図

3

伝祥応寺跡

● 伝祥応寺

・本跡は尼寺伽藍の一部とする説もあったが、近年の調査によって、鎌倉時代末期に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあたると思われる。

・旧鎌倉街道と言われる切り通しに東面して、土塁（基底部幅三m 高さ一、二m以上）と溝とで東西三十m、南北四十五mの長方形の区画が形づくられている。現存する大小十五個の礎石の分布などから、東西九m、南北十八mほどの規模の堂がその中央にあり、瓦を用いない建物だったと推定される。

・出土品には鉄製風鐸、板碑、銭貨などがある。

● 現・祥応寺

・黄檗宗（禪宗）・黒金山と号す。

・祥応寺は、本多（国分寺市）新田開発に際して、村民儀右衛門が深川海福寺第六世快門に依頼、開山創建となった。

・「新編武蔵風土記稿」による縁起

（本田新田）祥応寺

境内除地、三段八畝、村の西にて国分寺村の界にあり。黒金山と号す。黄檗宗、江戸本所羅漢寺（註：現五百羅漢寺）の末、客殿五間に三間、本尊釈迦木の坐像長一尺余、開山は江戸深川海福寺第六世快門なり。儀右衛門開発の後此僧に囑託して一字を起立せり。故を以て開山とす。且幸に村里に廃寺あるを以て其よしを訴へ上て、旧名を襲へりと云ふ。

伝鎌倉街道
でんかまくらかいどう

●伝鎌倉街道（平成四年 国分寺市教育委員会）

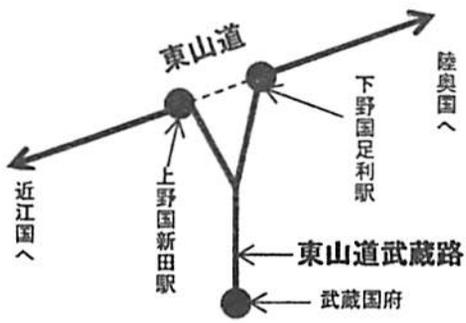
鎌倉時代、幕府の置かれた鎌倉と各地を結び、のちに「鎌倉街道」と総称される幹線道路が整備されていった。武蔵国内を通るものうち、上道（律令制下の東山道武蔵路をほぼ踏襲する）は特に有名である。

・市域を通過する「上道」は鎌倉から町田、府中を経て北上し、上野・信濃に至っており、街道沿いに有力御家人が勢力を振るって来たことから、軍事的にも重要な道路であったことが知られる。

・市内の「上道」の道筋は、この切り通しを含めて部分的に伝承されており、北方の伝祥応寺跡や恋ヶ窪廃寺跡（西国分寺駅東南）発掘調査の結果、次第に明らかになりつつある。



昔を偲ぶ切り通し路



●東山道武蔵路
とうざんどうむさしかち

・七世紀に律令制が確立されるとそれに伴って行政区画の整備も行われ、いわゆる「五畿七道」が設置された。この制度により畿内以外の国々はそれぞれ所定の「道」に属し、同時にそれらの国の国府を結ぶ同名の官道が建設されることになった。

・この際、武蔵国は相模国に東接する海沿いのくにであったが、近江国を起点に、美濃国・飛騨国・信濃国・上野国・下野国・陸奥国（当時はまだ出羽国はなかった）と本州の内陸国が属する東山道に属することになった。このため、道としての東山道にもこれらの国々から大きく外れたところにある武蔵国の国府を結ぶ必要が生じた。

・普通官道は地理的制約から特定の国の国府を通れない場合、支道を出して対処するのが定石であり、武蔵国の場合は、上野国と下野国との間で本道を曲げて、上野国の新田駅から南下して武蔵国府と下野国の足利駅というルートが設置された。この南下した路が東山道武蔵路である。

【国庁（こくちやう）】
国司（こくし）という都から来た役人が儀式や政治を行う中
心的な役割を担った役所の中核施設をいう。

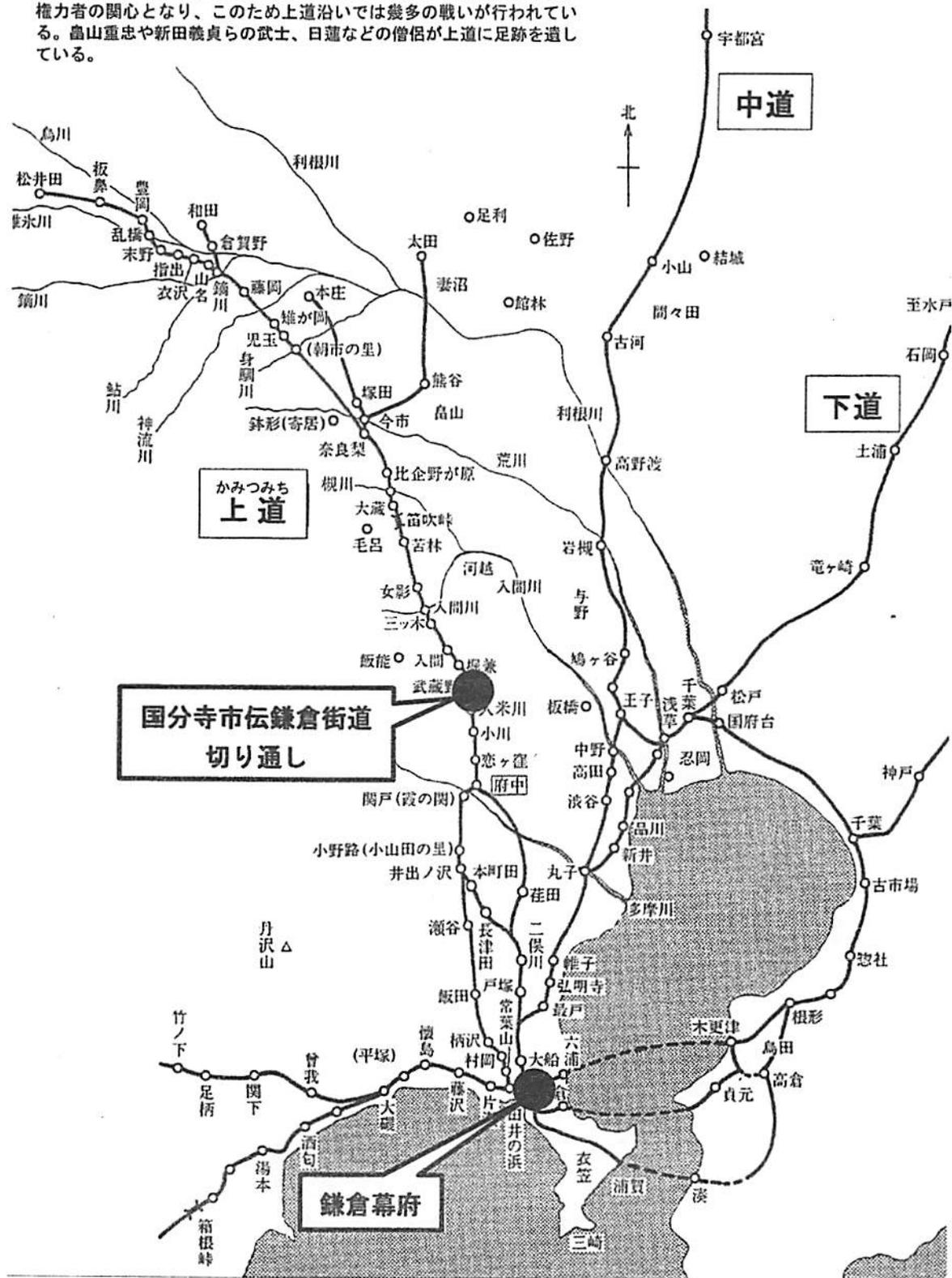
【国衙（こくが）】
国庁の周囲に設けられた国の行政事務を行っていた役所群
をいう。

【国府（こくふ）】
国庁・国衙を含めた役所に勤務していた役人の館や、兵士
等の宿舎・市・学校・百世の民家などを含む範囲全体のこと
をいう。

鎌倉街道

鎌倉街道は、全国各地の拠点と鎌倉を結ぶ中世の幹線道路である。このうち鎌倉街道上道は、鎌倉から武蔵国を縦断して上野国（群馬県）を經由し、信濃国（長野県）に通じる道である。鎌倉時代の記録から、おおよその経路を押さえることは可能である。

街道は、物資の輸送や人々の往来などの点で重要な役割を果たした。交通の要衝を抑えることが支配の足がかりとなるため、幹線道路の掌握が権力者の関心となり、このため上道沿いでは幾多の戦いが行われている。畠山重忠や新田義貞らの武士、日蓮などの僧侶が上道に足跡を遺している。



5 武蔵国分尼寺跡 むさしこくぶんにしあと

●武蔵国分尼寺跡

・奈良時代中頃、聖武天皇の詔により鎮護国家を祈願する官立寺院として国分寺(僧寺)とあわせて国分尼寺が国ごとに建立された。
・尼寺の正式名称は、「法華滅罪之寺」と定められた。よるところの「法華経」は女人成仏を説いており、尼寺の成立には女人救済を願う光明皇后の意向が大きく働いたものとも考えられている。

●金堂跡

* (光明皇后) 聖武天皇の皇后)

・仏殿。本尊をお祀りする堂で、尼寺伽藍の中心にある最も大きな瓦葺たてもの。屋根の大きさに築かれた高さ1mほどの基壇上に建てられた。

・僧寺(武蔵国分寺)と同じと推定される河原石による乱石積基壇や雨落石敷、階段などの痕跡は一切残っていないが、かろうじて残存していた基壇掘り込み部(版築土)の規模と地上部の規模をほぼ同じと考えて東西二十六・七m、南北十八・五mの復元。
・外観は、屋根を寄棟造、正面間口の柱間を七間として想定した。正面中央五間と背面中央は両開きの板扉。このため金堂内部には薄明りがさし、扉が閉まっても真つ暗ではなかったと推察される。広い堂内中央には須弥壇が据えられ、丈六の阿弥陀三尊像などの仏像が安置されていた。

●尼坊跡

・尼僧の住まい。中軸線上にのっており、講堂の背後に建てられた。
・桁行約四四・五m、梁行約八・九mの東西棟礎石建物。本瓦葺、

切妻造。柱の下にあつた礎石七〇個は全て失われたが、基礎工事の礎石据付掘方が規則正しく並んでいる。半数弱は未確認だが、全ての柱位置が復元できる。

・掘方は一辺一・三〜一・七mの方形で、深さ〇・七mほど掘り込み、版築(厚さ五〜十五cmの土を一層ずつ突き固めては重ねる工法)を行う。上部には五〜十五cm大の川原石を多数入れ礎石を安定させた。

・部屋は五房あり、昼間の居住・勉強の間や寝室などの場であつた。
・尼僧の定員は天平十三年(七四一)の国分寺建立の詔に十人と規定されている。僧寺の僧坊が尼坊と同じ規模の建物二棟で、僧侶の定員が二十人とされたのに対応する。

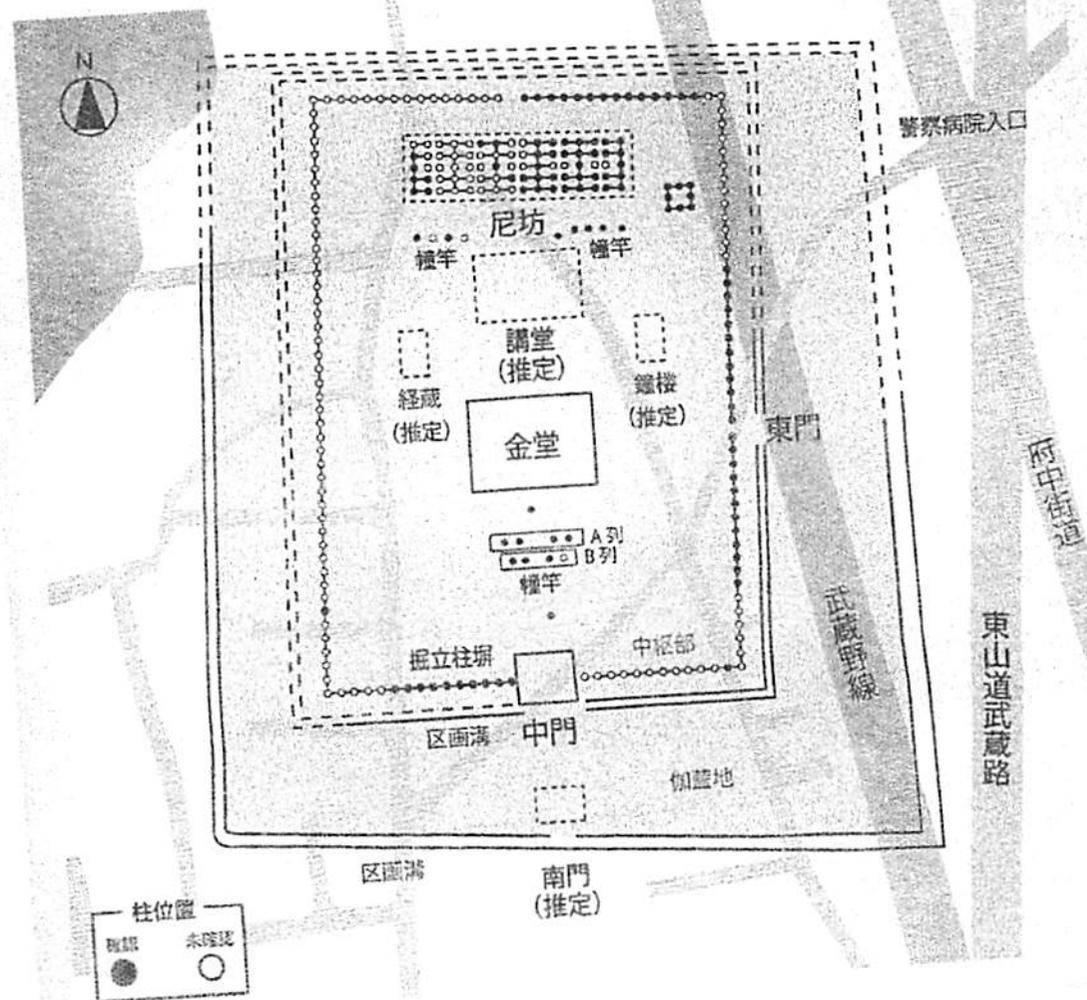
●講堂跡

・講堂は經典の講義などを行う建物。往時の規模に復元された金堂基壇と尼坊との間は広く空白地となっているが、中軸線上には講堂が、その東西には鐘楼と経蔵が配置されたと想定される。
・講堂の基壇規模は僧寺にならつて金堂より小さく想定し、東西二十二m、南北十五・二mとした。なお、建物外観は唐招提寺講堂などを参考に想定した。鐘楼は時刻を告げる鐘を釣り下げた建物、経蔵は大切な経巻をしまっておく建物で、いずれも二階建て、同じ大きさの建物を左右対称に置いた。

●中門

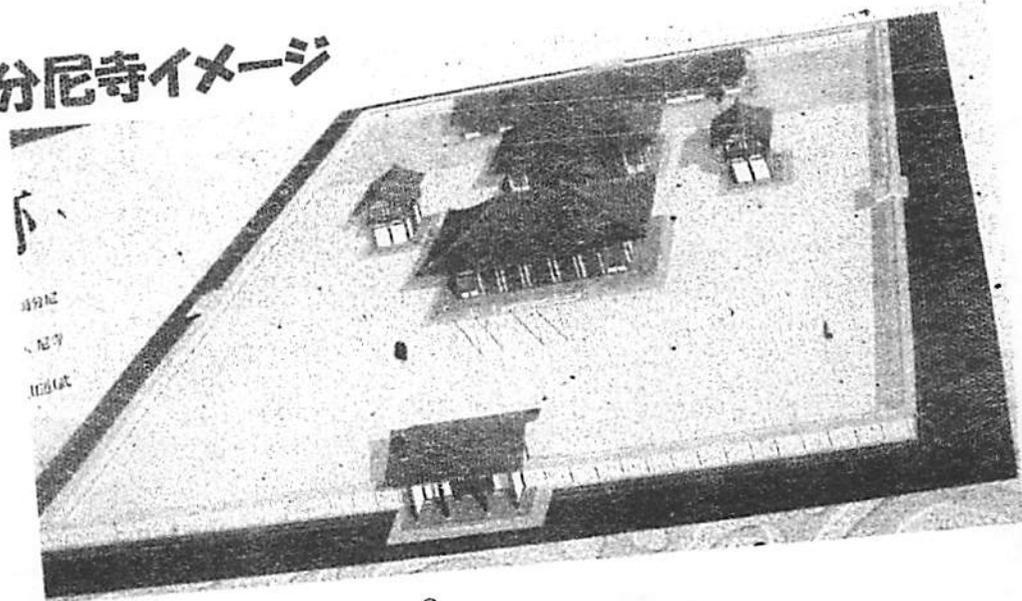
・金堂・尼坊を結ぶ中軸線上に設けられた門。間口九・八m、奥行六・八m程度の三間一戸の八脚門と推定される。現地では基壇上にレンガで表示している。

武蔵国分尼寺伽藍配置図

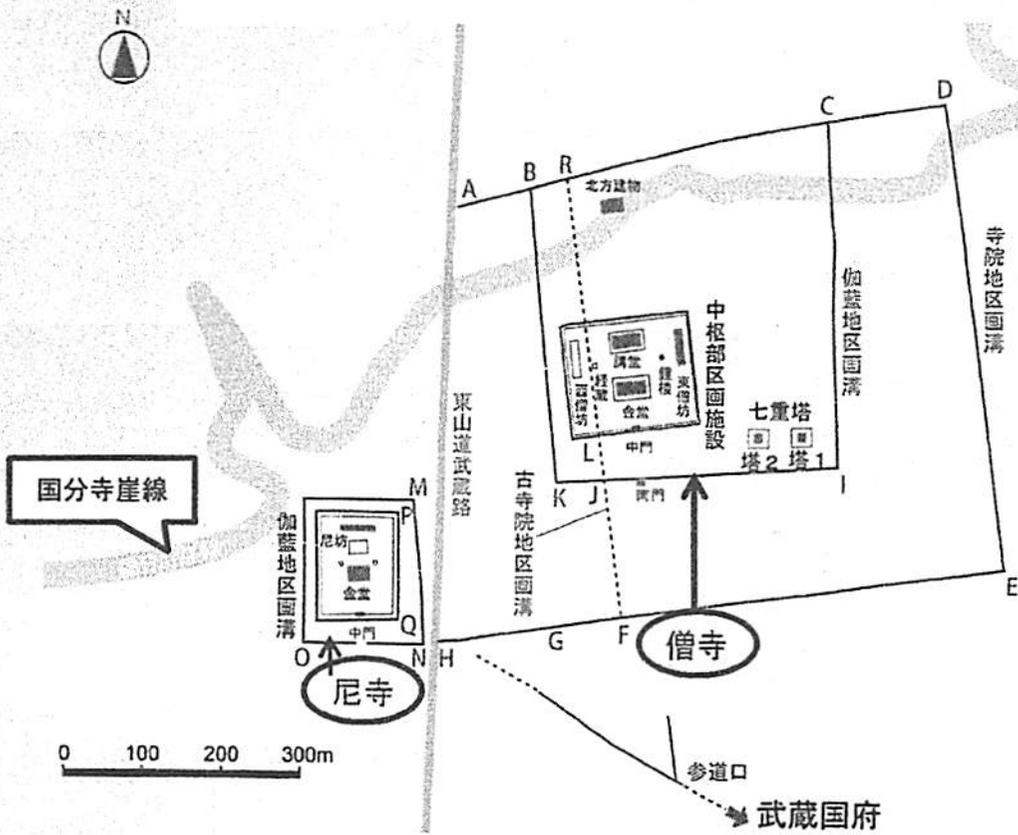


●— 尼寺主要遺構全体図

武蔵国分尼寺イメージ



武蔵国分尼寺跡・武蔵国分寺跡位置図



武蔵国分寺イメージ



6 武蔵国分寺跡

●武蔵国分寺跡（平成八年 国分寺市教育委員会）

・天平十三年（七四一）の聖武天皇の詔により、鎮護国家を祈願して創建された武蔵国分寺は、昭和三十一年以来の発掘調査によって東西七二〇m南北（中軸線上）五五〇mの寺地と、寺地中央北寄りの僧寺寺域（三六〇m×四二〇m四方）および寺地南西隅の尼寺寺域（推定一六〇m四方）が明らかになり、諸国国分寺中有数の規模であることが判った。さらに、この中で寺地・寺域は数回の変遷があることが確認されている。

・また、僧寺では諸国国分寺中最大規模の金堂をはじめ講堂・七重塔・鐘楼・東僧坊・中門・塀・北方建物、尼寺では金堂（推定）、尼坊・中門（推定）などが調査されている。

・武蔵国の文化興隆の中心施設であった国分寺の終末は不明だが、元弘三年（一一三三）の分倍河原の合戦で焼失したと伝えられている。

●武蔵国分寺の伽藍配置

・諸国国分寺の中でも最大級の寺域を有する広大な寺域内には、「七堂伽藍」と呼ばれる主要建物が計画的に配置され、鎮護国家のための宗教活動が展開されていた。

・飛鳥時代に始まる寺院の伽藍配置は、時代と共に大きく変化している。たとえば、飛鳥時代の寺院は伽藍の中心に釈迦の仏舍利（火葬した遺骨）を安置する塔を置いたのに対し、奈良時代は伽藍の中心に本尊仏（釈迦如来）を祀る金堂が置かれるようになり、

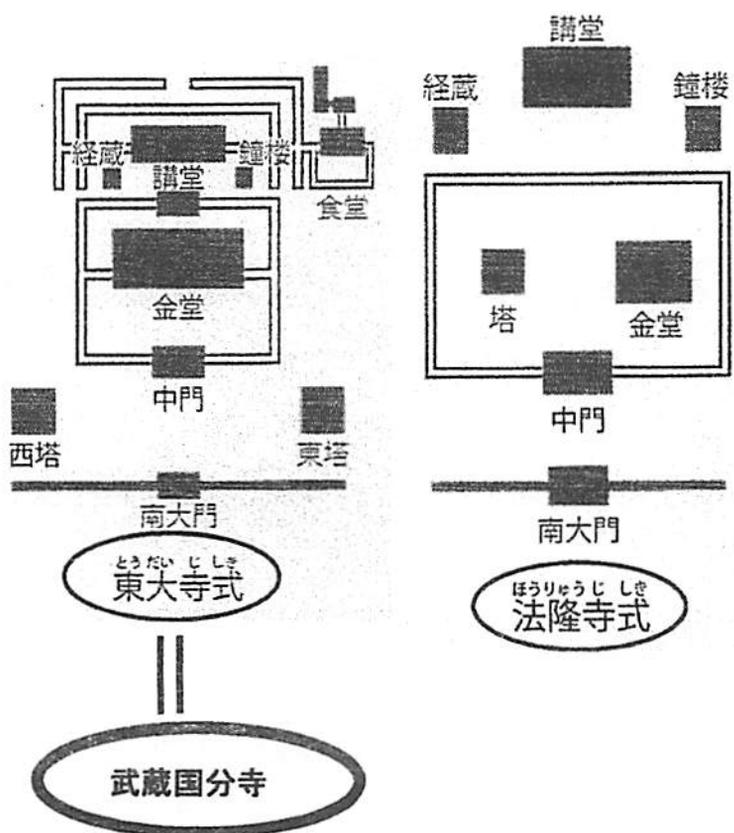
そして塔は法舍利（経典）を安置するシンボリックな存在において、廻廊の外に置かれるようになった。

・諸国国分寺の伽藍配置は

法隆寺式 古い形態 Ⅱ 廻廊内に金堂と塔が併置される。

東大寺式 新しい形態 Ⅱ 南大門・中門・金堂・講堂が一直線に並び、塔は廻廊外に置かれる。

後者が大多数を占め、武蔵国分寺は東大寺式伽藍配置を採用。



●金堂

・本尊仏を安置する建物であり、東西三六・一m、南北一六・六mの東西棟礎石建物で、諸国国分寺中最大である。現在基壇には二三個の礎石が往時のまま残っている。

・金堂跡は乱石積基壇（土壇の外装に玉石を用いたもの）の上に建っており、この基壇は礎石面の下二・六mの深さからローム土と黒色土を交互に突き固める「版築法」によって築かれている。

●金堂前面地区

・平成十九年に中門の北側を調査した。この場所は金堂の前面であり護国を祈願する法要などが行われた。

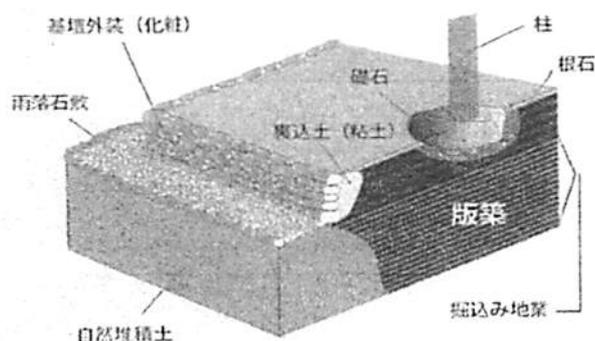
・中軸線を挟んで、法要時に幡（権威を表す旗）を吊り下げる幢竿の遺構が東西に並んで二本一列と四本一列（推定）が確認出来た。

●講堂

・經典の講義などが行われる建物。礎石は大部分が失われている。

・金堂跡と同様に昭和三十一年発掘調査が行われ、そのごも何度と行われた。

・こうした調査の結果、基壇が増設され、創建と再建の二回建てられていたことが判明した。再建期の建物は東西三六・二mである。



版築工法

7

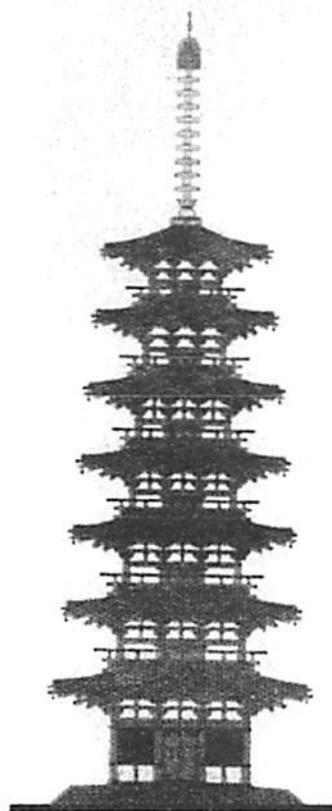
武蔵国分寺七重塔跡

●七重塔

・天平一三年（七四一）の国分寺建立の詔に「造塔の寺は国の華たり」と象徴的に記されている塔は「金字金光最勝王経」を安置する七重塔であるが、諸国国分寺の中には、発掘調査の結果、五重塔と推定されるものもあり、かならずしも七重塔に統一されたものではない。

・昭和三九年に行われた塔跡の発掘調査によって、基壇外周の補修の痕跡や、心礎以外の礎石の据替の痕跡などが明らかになり、塔は同位置で再建されたことが確認された。

・再建された塔は、深さ一・八mのところから版築によって築かれた、一辺一八mの乱石積基壇の上に乗った、長さ一〇m四方の規模の礎石建物で、高さは六〇mほどあったと推定される。現在、基壇上には、中央に径七三cm、深さ四五cmの心柱穴がある。



復元七重塔

● 金堂前面に立つ幢竿跡 どうかんめと

● 幢竿 どうかん

のぼり旗を懸け吊した高竿の跡と考えられる掘立柱式の柱穴。旗を「幢幡」あるいは「幡」ばんといい、高竿を「幢竿」どうかん又は「幢」という。

・ 尼寺中樞部では、金堂基壇の南端より十二m離れた位置に、東西に四本の柱穴が並んで発見された。中央は参道のため五mほど開いている。柱を埋めるための穴は一辺一・二m×一・五m、深さ〇・六mほどの長方形で、柱径は二五cm。柱の高さは六mあまりとなる金堂の軒先の高さを超えていたものと想像できる。

・ 金堂前面が重要な儀式の場となり、様々な法会ほうえがひらかれていたことが実際の遺構から確認された例は全国的にも珍しい。

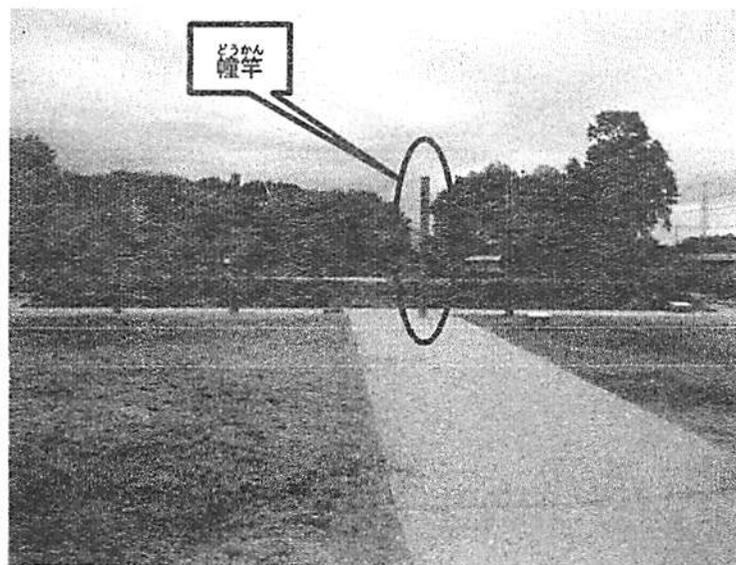
● 「幡」ばん

・ 「幡」は「波多」と呼んでいたようで、荘嚴のため法要を行う庭などに立てた高竿のほか、仏殿の柱や天蓋などにも懸ける。

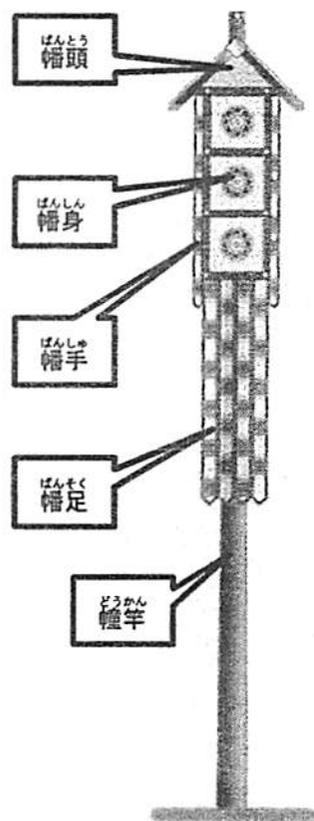
・ 材質は綿・綾・絹・麻布などで、正倉院宝物には染めや刺繍などを施したあらゆる種類のものがある。色は赤・黄・緑・紺・紫などを重ねた色鮮やかなものが多い。

・ その形は人形を模したような三角形の幡頭に、細長い幡身ばんしんが連なる。幡身はいくつかの坪に区分けし、左右の二本ずつの幡手ばんしゅがつき、幡身の下に数本の細長い幡足ばんそくを垂らす。

・ 東大寺で天平宝字元年（七五七）の聖武天皇一周忌齋会に用いられた幡は六・四mにもなる。



金堂前の どうかん 幢竿



聖武天皇が全国に国分寺・国分尼寺の創建を奨励した^{みことのり}詔

天平十三年（741）

「私は徳の薄い身であるのに、恐れ多くも天皇という重い任務を受けている。しかし、民を導く良い政治を広めることが出来ず、寝ているときも目覚めているときも恥ずかしい気持ちでいっぱいだ。昔の賢い君主は、みな祖先の仕事をよく受け継ぎ、国家はおだやかで無事であり、人々は楽しみ、災害は無く幸福に満ちていた。どうすればこのような政治が出来るのであろうか。この数年は、凶作が続き伝染病が流行している。私は恥ずかしさとおそろしきで自分を責めている。

そこで、国民に大きな幸福をもたらしたいと思う。以前（天平9年）、各地の神社を修造させたり、諸国に丈六（約4.8m）の釈迦牟尼仏一尊を造らせるとともに、大般若経を写させたのもそのためである。おかげで、ことしは春から秋の収穫まで風雨が順調で五穀も豊かに稔った。これは、誠の心が伝わったためで、神霊の賜りものである。これからますます尊ばねばならない。金光明最勝王経には「もし広く世間でこの経を読み、供養し、広めれば、われら四天王は常に来てその国を守り、一切の災いもみなとりのぞき、心中にいただくもの悲しい思いや疫病もまた消え去る。そしてすべての願をかなえ、喜びに満ちた生活を約束をしよう」とある。

そこで、諸国はそれぞれ七重塔一基を敬って造り、合せて金光明最勝王経と妙法蓮華経各十部を写経させることとする。私もまた、金文字で金光明最勝王経を写し、塔ごとに1部ずつ納めたいと思う。これにより、仏教の教えが大空・大地とともにいつも盛んとなり、仏のご加護が常に満ちる事を願う。

七重塔を持つ寺（国分寺）は「国の華」であり、必ず良い場所を選んでまことに長く久しく保つようにしなければならない。人家に近すぎると悪臭が漂うからいけない。遠すぎると集まる人が疲れてしまうから望ましくない。国司は国分寺を荘厳に飾り、いちも清潔に保つように努めなさい。間近に仏教を擁護する神々を感嘆させ、仏が望んで擁護されるように願なさい。全国にあまねく布告を出して、私の思っている事を民に知らせなさい。」

<条文>

- 第一条 国毎の僧寺（国分僧寺）は、寺の財源として封戸を五十戸、水田十町を施し、尼寺（国分尼寺）には水田十町を施しなさい。
- 第二条 僧寺には必ず二十人の僧を住ませ、その寺の名は金光明四天王護国之寺としなさい。また、尼寺には十人の尼を住ませ、その寺の名は法華滅罪之寺としなさい。二つの寺は距離を置いて建て、僧尼は教戒を受けるようにしなさい。もし僧尼に欠員が出たときは、直ちに補充しなさい。毎月八日に、必ず最勝王経を読み、月の半ばには戒羯磨を暗誦しなさい。
- 第三条 毎月の六斎日（八・十四・十五・二十三・二十九・三十）には、魚とりや狩りをして殺生をしてはならない。国司は、常に監査を行いなさい。

ふばいがわら 国分寺を焼失した分倍河原の戦い

分倍河原の戦い（ふばいがわらのたたかい）は、鎌倉時代後期の元弘3年（1333年）5月15日・5月16日に、武蔵国多摩川河畔の分倍河原（現在の東京都府中市）において、北条泰家率いる鎌倉幕府勢と新田義貞率いる反幕府勢との間で行われた合戦である。

●背景

元弘3年（1333年）5月8日、新田義貞は上野国生品明神で鎌倉幕府打倒の兵を挙げた。この旗揚げ時の新田軍は、義貞以下一族の大館宗氏、堀口貞満、岩松経家、里見義胤、脇屋義助、江田行義、桃井尚義ら総勢でもたった150騎ばかりであったと謂われる。しかしながら、南行して利根川に至ったところで越後国の新田党（里美、鳥山、田中、大井田、羽川の各家）や、甲斐・信濃の源氏一派が合流し、軍勢は7,000騎にまで及んだ。5月9日、利根川を越えたところで足利高氏（後に尊氏）の嫡子千寿王（後の足利義詮）が紀五左衛門に伴われて合流、さらに外様御家人最有力者足利高氏の嫡男が加わったことにより、この後上野、下野、上総、常陸、武蔵の鎌倉幕府に不満を持った武士たちが次々と集まり、新田軍は20万7千まで膨れ上がったとも言われる。さらに新田軍は鎌倉街道沿いに南下し、入間川を渡る。迎撃にきた桜田貞国率いる鎌倉幕府軍を5月11日小手指原の戦い、5月12日久米川の戦いで、相次いで撃破。幕府軍は、武蔵国の最後の要害である多摩川で新田軍を食い止めるべく、分倍河原（現在の東京都府中市）に撤退した。

●経過

鎌倉幕府は、小手指原・久米川の敗報に接し、新田軍を迎え撃つべく、北条高時の弟北条泰家を大将とする10万の軍勢を派遣。分倍河原にて桜田貞国の軍勢と合流した。5月15日、2日間の休息を終えた新田軍は、分倍河原の幕府軍への攻撃を開始。が、援軍を得て士気の高まっていた幕府軍が、逆に新田軍を撃破。新田軍は堀金（狭山市堀兼）周辺まで退却を余儀なくされた。この敗走の際、武蔵国分寺（東京都国分寺市）が焼失したといわれる。

翌5月16日新田軍は、援軍に駆け付けた三浦義勝の献策により、未明に幕府軍を急襲。幕府軍は敗走し、関戸（東京都多摩市）にて壊滅的打撃を被った。北条泰家は、家臣の横溝八郎の奮戦によって一命を取り止め、鎌倉に逃走した。形勢が入れ替わった理由については、幕府軍が初日の勝利に奢って油断していたという説もあるが、足利尊氏による六波羅探題攻略の報が関東に到達しており幕府軍増援部隊の寝返りがあったのではないかという説もある。

●影響

分倍河原の戦いで新田軍が幕府軍に対し決定的な勝利を収めたことにより、幕府軍は完全に守勢に転じた。この後、新田軍には次々に援軍が加わり、『太平記』によれば60万もの大軍勢になったという。幕府軍は鎌倉に籠もり7つの切通しを固める。新田軍は要害の地鎌倉を攻めあぐんだが、稲村ヶ崎から強行突破し、幕府軍の背後を突いて鎌倉へ乱入。倒幕運動最後の合戦（東勝寺合戦）が行われた。

8 現・国分寺本堂

- ・医王山最勝山国分寺は、真言宗豊山派の寺院。
- ・鎌倉時代後期の元弘三年（一一三三）「分倍河原の戦い」で焼失した武蔵国分寺は、新田義貞の寄進により薬師堂が再建された。江戸時代に入ると徳川幕府は、由緒ある寺社に領地を与えて保護した。国分寺の薬師堂も三代將軍家光から慶安元年（一六四八）に九石八斗九升八合の寄進を受け、朱印状を下付された。以後十四代までの朱印状も残っている。
- ・享保十八年（一七三三）には本堂も再建されている。現在の本堂は昭和六十二年に改築されたもの。

9 現・国分寺楼門

- ・建物は間口六・二m、奥行三・七mの楼門造り。板金葺で、江戸時代の建築様式をよくとどめている。
- ・この門は、米津出羽守田盛（通称内蔵助）のもと菩提寺として建立された米津寺（現久留米市）の楼門を明治二十八年に移築したもの。
- ・国分寺境内の諸建築物とともに、国分寺の変遷を知るうえで重要な建物である。
- ・米津出羽守

出身地は、三河国碧海郡米津村で出羽守田盛の時に久留米村前沢を知行地とする。石高は、一万五千石 大坂定番を勤める。

10 現・国分寺仁王門

- ・この門は、宝暦年間（一七五一〜一七六三）に建立された入母屋造の八脚門で、間口九m、奥行三・六mある。
- ・使用されている建築材は、「新編武蔵風土記稿」の仁王門の条に「此の門近世までの薬師堂なりしを再興の時きりちぢめて仁王門になせり」とあるように、建武二年（一三三五）に建立された旧薬師堂（江戸時代初め頃の「国分寺村古絵図」によると、僧寺の金堂跡付近にあった）に使用されていたものを再利用したと伝えられているが、杉材の柱などに残る組立て用の穴の彫り方からこのことがうかがえる。
- ・この門の左右には、阿・吽二体の仁王像（高さ二・五m）が安置されているが、享保三年（一七一八）に造立されたもので、作者は不明である。

11 現・国分寺薬師堂

- ・建武二年（一三三五）に新田義貞の寄進により国分僧寺の金堂跡付近に建立されたと伝えられているもので、その後、享保元年（一七一六）に修復されたが、宝暦年間（一七五一〜一七六三）に現在地で再建された。
- ・堂内正面の長押には、明和元年（一七六三）奉献された深見玄岱の筆になる「金光明四天王護国之寺」の寺額がかけられているが、この寺額は東大寺西大門の勅額を模したものである。

●木造薬師如来坐像

- ・薬師堂に安置されている木造薬師如来坐像は、平安時代末期

あるいは鎌倉時代初期の製作と考えられ、作者は不明。寄木造の漆箔仕上げで、像高は約一九一・五cm。蓮華座に坐し、印相は右手が施無畏印、左手に薬壺やくこを持っている。薬師如来は日光・月光の両菩薩を脇侍わきじとし、眷属けんぞく（従者）として十二神像を従えているが、当国分寺の十二神像は、頭部の墨書から元禄二年（一六八九）の作であることが分かっている。

●万葉植物園

・武蔵国分寺が栄えていた奈良時代に編纂された「万葉集」より、当時の歌人達が好んで歌の題材とした植物を集め、国分寺創建のころの生活や、文化、思想を知る一助にと、元国分寺住職が昭和二十五年に計画し昭和三十八年まで、十三年かかって採集したものである。現在約百六十種の植物が集められているが、これらは当地で栽培可能な限りの万葉植物を集めている。又、万葉植物には異説が多いので、異説のある植物はつとめて同じ場所に植えてある。広さは約八千平方mで、万葉植物は一括して市の天然記念物に指定している。



仁王門



本堂



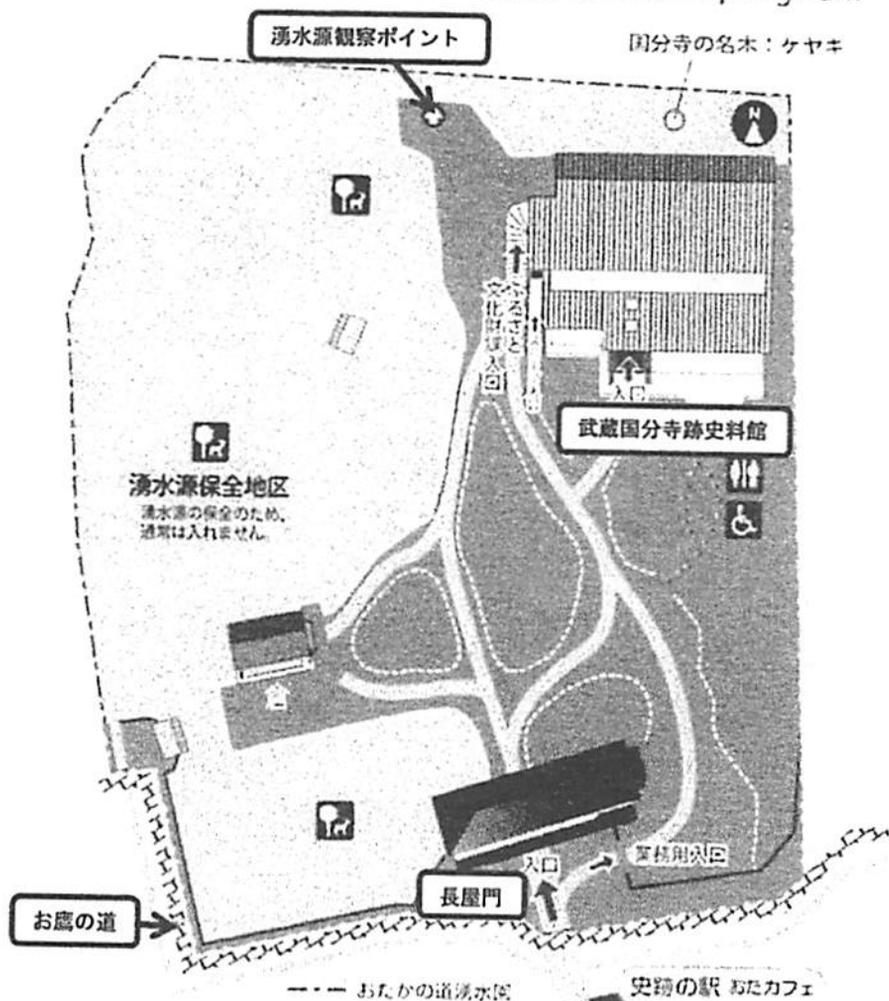
薬師堂



楼門

おたかの道湧水園

Otaka-no-michi Spring Park



公園敷地面積：3491.96 m²

長屋門・倉：市重要有形文化財（建造物）

- チケット
Tickets
- 案内所
Question & Answer
- お手洗
Toilet
- 身障者用設備
Access Facility
- 自然保護区
Natural preserve

武蔵国分寺跡
資料館付属棟

●真姿の池（平成十年指定名勝）

・真姿の池は、都内では青梅市の御岳溪流とともに環境庁の「名水百選」に選定された「お鷹の道・真姿の池湧水群」の一部であり、東京都の都市計画国分寺緑地にも指定されている。また周辺は東京都の国分寺崖線緑地保全地域に指定されている。

・真姿の池の名の由来は、嘉祥元年（八四八）不治の病に苦しんだ玉造小町が、病氣平癒祈願のため国分寺を訪れて二十一日間参詣すると、一人の童子が現れ、小町をこの池に案内し、この池の水で身を清めるようにと言つて姿を消したので、その通りにしたところ、たちどころに病は癒え、元の美しい姿に戻った。それから人々はこの池を「真姿の池」と呼ぶようになったという伝説からきている。真姿の池は「新編武蔵風土記稿」に「広き二間四方許池中の狐嶋に弁天の祠宇を置、この池水も田地へ灌ぐ」とある。

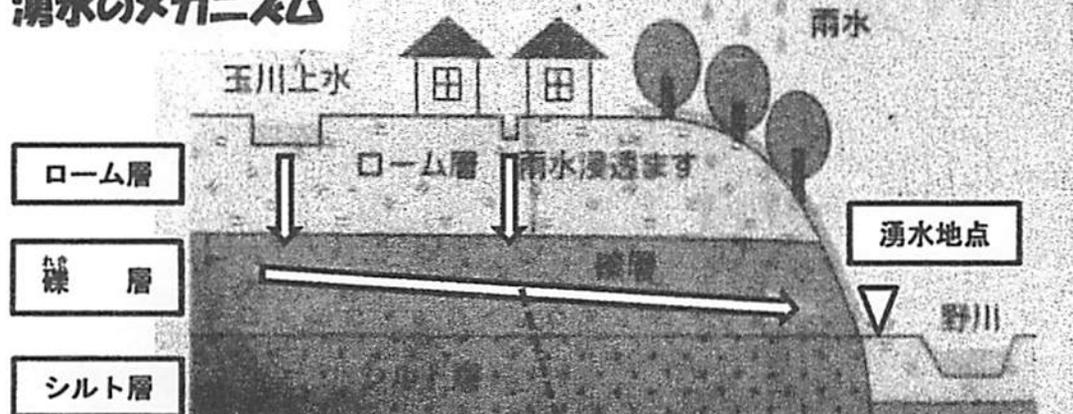
・周辺の雑木林は、下草の刈り払いが行われて管理が行届いており国分寺崖線の雑木林景観がよく保存されている。国分寺崖線とは国分寺から小金井・三鷹・調布・狛江を経て世田谷の等々力渓谷に至る標高差約十五mほどの崖線で「ハケ」と呼ばれている。東京を代表する湧水の価値を文化財として評価された最初の自然地理的名勝である。



湧水

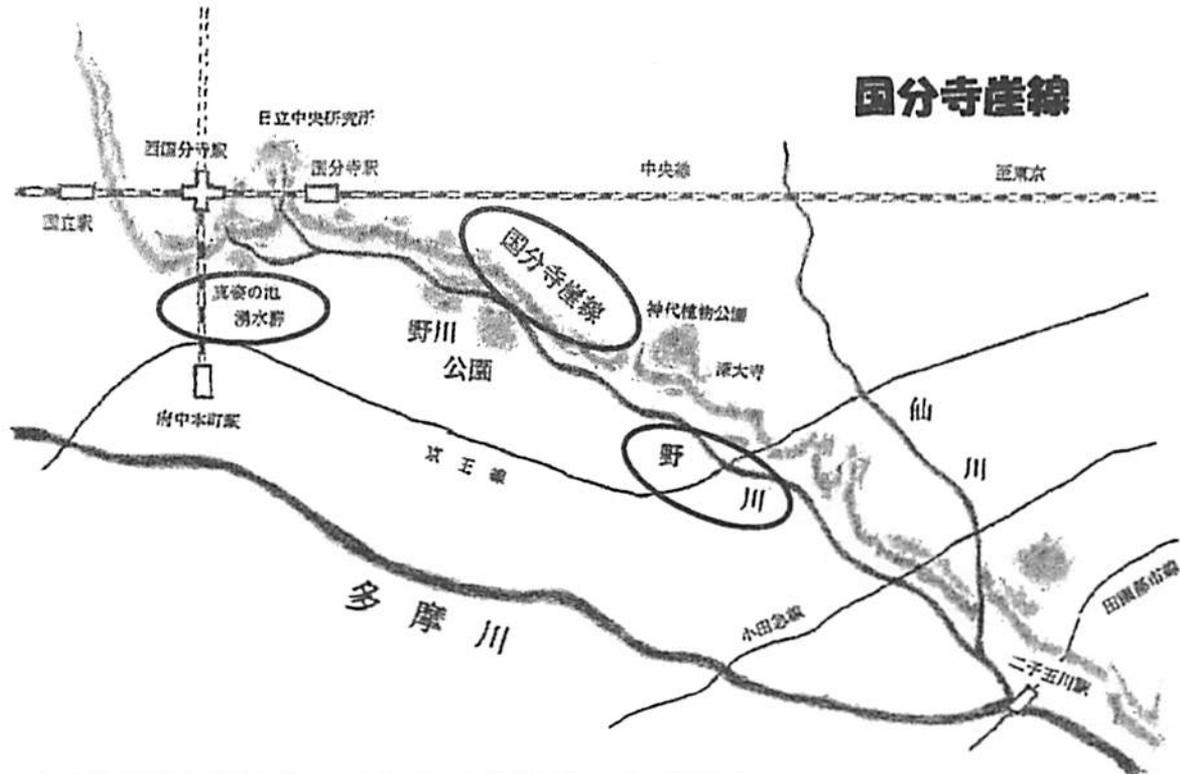


湧水のメカニズム



武蔵野礫層は地下水の帯水面である

国分寺崖線



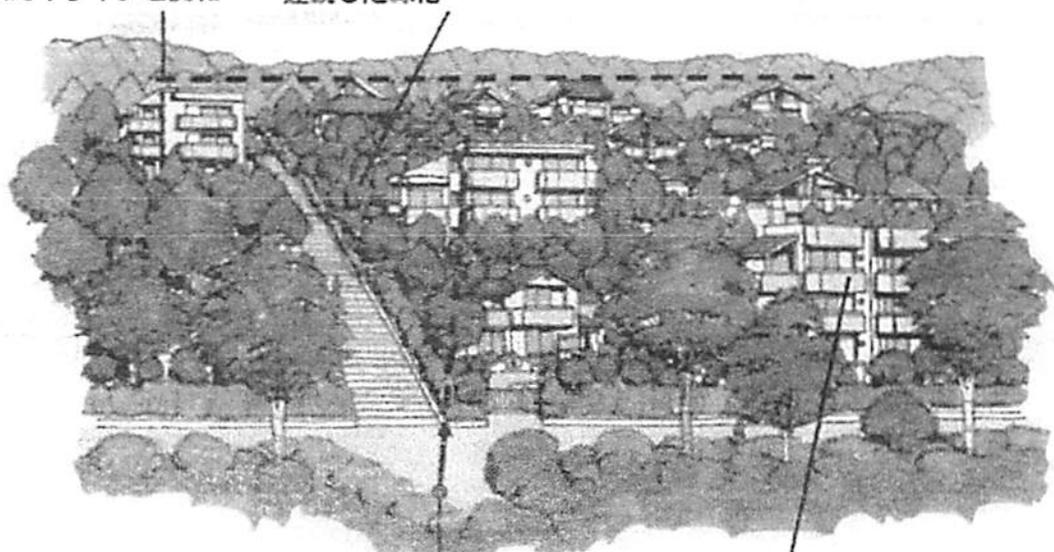
国分寺崖線の形成

武蔵野台地の基部には第四紀更新世前期に海底で形成された堆積岩の層が見られます。更新世中期に海岸線が後退した後、約7~10万年前に多摩川が流路を変えながら流れ武蔵野面となる扇状地ができました。そしてその堆積岩層の上部に礫層が作られました。武蔵野面の地下に見られる礫層は武蔵野礫層と呼ばれます。その後多摩川の流路の範囲が狭まることで浸食が進み、立川面ができました。武蔵野面・立川面ともに表面には約1~数万年前に堆積した火山灰からなるロームが見られます(武蔵野面では武蔵野ロームと立川ロームの二層、立川面には立川ローム一層が見られます)。武蔵野礫層は地下水の帯水面となり、これが崖部に露出した地点から湧水が生じています。国分寺崖線に点在する湧水からの水を集めて流れるのが野川で多摩川に合流しています。

周辺建築物群の
スカイラインと調和

国分寺崖線の緑と
連続した緑化

国分寺崖線景観形成イメージ



低地部から見たときに崖線の台地部の
樹木の最高高さを超えないよう工夫

緑と調和した落ち着いた
色合いを誘導

●成り立ち

・武蔵野丘陵の「国分寺崖線」と呼ぶ段丘崖とその下端部付近の礫層から浸出する湧水を利用し、雑木林の風致を生かして作られた近代の別荘庭園。

・三菱合資会社の社員で後に南満州鉄道副総裁から貴族院議員になった「江口定條」が大正2年〜4年に別荘を構え「隋宜園」と命名した。

・岩崎彦彌太（弥太郎の孫）は江口家から昭和4年に別荘を買い取り昭和9年に和様折衷の木造主家に建て替え庭園建築として紅葉亭を新築、主家前面の芝生地と下方の湧水、園地を結んで回遊隙庭園を完成させた。

・昭和40年代本庭園を守る住民運動が発端となり、昭和49年に都が買収し有料庭園として開園、平成23年9月21日に殿ヶ谷戸庭園（隋宜園）として国の名勝として指定された。庭園の名称は昔この地が国分寺村殿ヶ谷戸との地名に由来する。

●見どころ

・次郎弁天池

地下水が湧出するハケ（崖）が敷地内にありこの湧水を利用して作られたのが次郎弁天池である。

・紅葉亭

数寄屋づくり風の茶室。茶会、句会などに利用。

・ししおどし

本来はイノシシやシカを追い払うために作られた。

・馬頭観音国分寺市内に11基残る馬頭観音のひとつ。馬は生活に欠かせない動物として大切にされ供養のために建てられた。

・竹の小径

次郎弁天池に通じる竹林の道。孟宗竹の竹林である。

・本館

岩崎彦彌太の別邸として昭和9年に建てられた洋館。内部は和洋折衷の形式になっていた。



おもな建物

W2 三井八郎右衛門邸

港区西麻布に1952年(昭和27)に建てられた邸宅です。客間と食堂部分は、1897年(明治30)頃京都に建てられ、戦後港区に移築されたものです。また、蔵は1874年(明治7)の建築当初の土蔵に復元しました。〔港区西麻布三丁目/主屋:1952年(昭和27)土蔵:1874年(明治7)〕



C1 ビジターセンター(旧光華殿)

1940年(昭和15)に皇居前広場で行われた紀元2600年記念式典のために建設された式殿です。1941年(昭和16)に小金井大緑地(現在の小金井公園)に移築され、光華殿と命名されました。江戸東京たても園の園圃にあたり、ビジターセンターとして改修しました。〔千代田区千代田/1940年(昭和15)〕



W3 子宝湯

東京の銭湯を代表する建物です。神社仏閣を思わせる大型の唐破風や、玄関上の七福神の彫刻、脱衣所の替天井など贅をつくした造りとなっています。〔足立区千住元町/1929年(昭和4)〕



W5 八王子千人同心組頭の家

八王子千人同心は、江戸時代、八王子に配備された徳川家の家臣団です。拝領屋敷地の組頭の家は、周辺の農家と比べると広くありませんが、式台付きの玄関などは、格式の高さを示しています。〔八王子市追分町/江戸時代後期〕



C3 高橋是清邸

明治から昭和のはじめにかけて日本の政治を担った高橋是清の住まいの主屋部分です。総得普請で、洋間の床は寄木張りになっています。2階は是清の書斎や寝室として使われ、1936年(昭和11)の2・26事件の現場になりました。〔港区赤坂七丁目/1902年(明治35)〕

〈高橋是清邸庭園〉港区赤坂にあった高橋是清邸庭園の一部を復元しています。組井筒を水源にした流れと、雪見型灯籠などを含む景観を再現しています。是清は芝生での日光浴や庭の散歩を好んだといわれています。



C5 伊達家の門【旧武蔵野郷土館収蔵】

田宇和島藩伊達家が、大正時代に東京に建てた屋敷の表門です。〈起り屋根〉の片香所を付けるなど、大名屋敷の門を再現したような形をしています。総厚塗り、門柱の上に架けられた冠木には、宇和島藩伊達家の木彫の家紋が施されています。〔港区白金二丁目/大正期〕



参考資料

- ・「武蔵国分寺のはなし」
国分寺市教育委員会
- ・「国分寺市歴史・観光マップ」
同
- ・「わが心の国分寺」巡訪事典
里文出版
- ・「東京都の歴史散歩」
山川出版社
- ・外各種パンフレット